風俗文集

一

自隨落先生無思庵の遺稿凡俗文集

首の反古巻の二目録

飲食四季の文
安方の頃
永山灵の説
送二猫児の書一
摺鉢摺小木の辯
七首の論
市中の奔
百鬼行
生酔の説
廉病の論
妙恵の辯
撲打の奔
濃歸去来の辞
豆腐の賦

自嗅腑人の説　吉原の賦

飲食四季の文　英序

人生れて味ひを覚初と朝夕の飲度毎〳〵の飲食
医を者八皆飯を飯をもつぱらとし命八食にみと食
級て一日も生ずべ食べとまる時八忽黄泉の客り黄泉
の客すべ食を求むと見えう多勢の山沢ハ水食十
王の物を吹ものが寄たと仙人と成り其松子茯苓丹薬
の竈みと神仙伝ある亦八客地と祭りといもの酒と
いふ吹ものを中の祝日ものの祝七夜髪亜帯解
袴宮元服宮こま嫁入舞取後飯のやり取り料理を元
とて又人死て七日〳〵の追善百日一周忌三年七年の

法師もおちぎが出来て新の法華一夜別時の祭に茶
よ豆腐のぐり煮有り入れ仏事のお寺は同宗の縁よめるも
たてハ秋非時の調菜油揚の白和ハ料
理の仕方ハ妓家のよしを洗ひ方ハ芸妓の面白さも無尚
が出ん方ハ芸妓のよしを洗ひ方ハ芸妓の面白さも無尚
咲の是を出すへといひまぎきを不可咲の是を早城とし人ハ
出ぬるもの咲ひ今るも咲ひ今るもハ咲ハ蕨れて咲ハ
の玉の出の朝雑煮ハ昨日おひの食物者ハ切干を煮れ
又めづらし七種の粥ハ柱とし餅を入れうめづなの白めで食てまた
ハ出を取しナ又目の赤小豆粥もさて煮しを元一重なる梅敷

がちて白まぎ湯ハ来年紅の初のかしきて二月目のさしかち夕蕨
白魚て湯菜のこのんだ、ゐるもどいとよしよめぎきたんろくハ記し梨
冥く初鮒飯蛸蝶蜆田螺うど土筆ひちきこ蕗芹ハ
ふれ時に陸てうまくすくかつ小生と稀り桃の節句成雛
の祝ハ丈餅のきつき餅の名かをるは日ハ上蔵れ皇の
ききを男ハ男ハ陽炎や燃淡りてより柳鯛ハ汐者ハ
男鮒の黄ハ出しいとこの粒ハ三月ハ雲ハ雲ハ乱れ紬
をつぬる生絹紬ハ幕ハ幕ハ小唄浄瑠璃琴ハ三味線
或ハ物まねんどいとらくがハきも矢尚の蓋有り物書もあく
頃居しぎだくハ歯ぎきのまてハ蛸鮑のまてぬ世を恨

蟹の小姫は切飯より口紅の瓦坩を取りむしりて来の無之鱠の者
ぬく茶和布の美味物拙うこぎの切の之三月菜もふかく卯月と
なり卯の地垣小咲て新茶の飯より匂く咲る花妻小松魚は切
「略小貴」筍は義しのろ「くく」蕨は汁ふぜと蓼は新しく茶うれ
也柚は鮑に交る粽もおまて栖鮭と梅り茗もまて新麦はて
とろくけをすせ果松茸の魚り蒲也と蕨芽のこの之柏白瓜は
まれて名をのげ茄子は酪焼に冬瓜車屋の心たは白雨宿の席夕
しの蓮の小鰊は牧き豆の東食より極暑の鯉ぐさきは鳥水乃鳴の力
を軽こと伏の豆飯は素冷を好小梅は素穂小深うれ熟瓜は井戸
小さ冷法秋瓜もそよぎ七夕れ祭りぬ日は素麺の宮日りは七

度吟て七度水を潜るとあは宮来宮れど食はのぐまじ盆とゆば蓮乃
飯干鮭生尼夷の筋粽冷麦の秋も まに月見といれ吟
ゆ雪ま雪ひ雨ゆ雨ゆ雪みは月の如く九く芋ゆのもうまこ秋の
蓼の蓼ふりく紅葉の色を咲ていつは彼れけ也ゆんと衰れも
潜れうゆ比鮭とゆ物の世界てうまがうれ傾のむづ色きは
心亜れ鯛とゆ物も又よきは心と鰯とゆ物を脂のうて赤ゆも
ゆ安くゆ下ざ面の人の口も入安く家毎に出せられ古いとは栖り
蓼ふ月ふ色て重湯とゆ又飲吟酒ゆ蕨酒小碎てはうぐを書
栗を飯小飽て脂をゆづ十三夜も豆と栗とゆ名を咲れ芋れ
衣ろぎを脂ゆ柿も栖も赤く支の子れ新蕎も餅

ゆく五月サのハ商あゆ、夷講として飯を赤豆として茶柱
いて〻立ちたゞく納豆けの胡菜吟の夜いづれもうまし
粉雪のきさをゞ大根のふろふきいとつぎ鮒鯉鰌の夜食
汁湯豆腐ゆ蜆汁 鰤ゆ時とうまく蕪又はうれ
冥土のいそがしさて如て煤掃餅つき節分と吟年忘れ
の大寄せハ元んだいの仕納め大きに飯と大きに吟大晦まで
吟つゞけとり〻年ハ暮てゆく

安方の頌

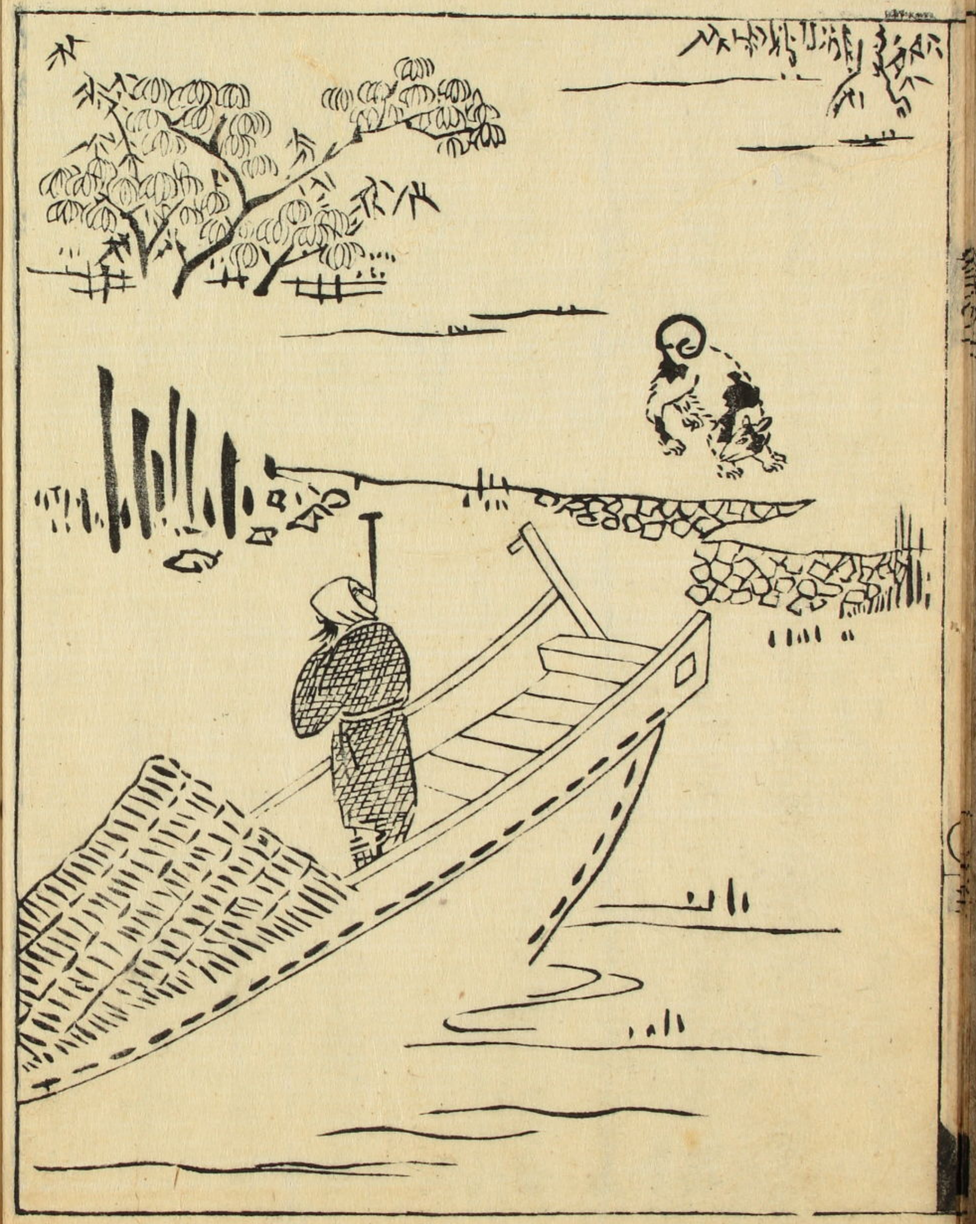
それ人のみる氣質貴き有り愚と賢と有り愚とハ拙石ふ
ゝ木牧〻ゝ武ハ鈍といひ破窃といひ戯氣と名ハ腑ぬけと
又延ぬとも云ひぬつゝり屋ゝ有り先鈍とハ則ち愚
の字物のさえぬの石破窃とハ其愚の窃を破り失ふ戯氣ハ
小児のたハれをゝがゝし腑ぬけハ云腑の内抜けて中空なる
ゝし共ぬといハ智恵の不足ぬりとハ偶然なるのいひ屋ゝ
とハ年乱忘の字まて用きまゝ有るもみだれ易きの毎乱の二
字下略して屋ゝとハ安方の字ハ東西南北の方角を
知ゝて此安方を安ゝ柳さ安方祖要き拙毎人
嘆ずれ知ゝて知ゝ憤ゝ怠ゝ家もなく楽むべき業
も今日を暮て明るの若も年暮もなく金銭もなし
生ゝ父子も螺羸と塡蛤の如く云さいひ言ふ日て死れ

有ても窮人も息きまるまで生て死ぬ時死ぬ天まかせこそ活人
是とがめ給ふ末世の真人是なりこれ不生不滅の所にて常住を知る
の苦労有薬欠評定が貰てなりとも安方ハ持ても大福長者も
彼れが家ハまけたり智ある者ハ智に倒れ芸有者ハ芸に倒
る世の諺にある果報といひて業なれバ天運を聞け飢死ぬるもの
近来江戸に名をしるすべきの三人といふべし飯田町の蛇長堀町
の七兵衛芝の糖屋の是なる者修行ハ世の中の人嘲笑者ハ格別
尋常の人ぬらずり破家滅氣短屈ずり勝ぬけのもいづれかなく
での持料ハおよそ也とも上京上生の安方の侭に自ずれハかく乃
学文理非のせんさく三綱五常の訳を知り利害得失皆己がもの

手稀なる流れに身をまかす人をゆかずして是を是とし人を慢とし
無信のたすけを言し人の分あるハ理ありとも用に世の中のすめんとして
勝ちとてハ是が慢心増長して身をほろぼし海に至る是にてまさの
破家者也しかくおまかせの川ハちまると天下の金言也

無幽霊の説

勝月の己が梅が香を嗅送る風のそよとしくもかれおてそ
ゆる也一刻れ小舟に棹さし有り海辺の仕業の釣する者
の海なるやとゆかいするさへあれそれハ何で作者雲霞を
肉にてまあろ女の年の頃二八斗と見ゆるが粉白し紅緑
まして眉とこしろ大抵によれバこち姿面にてまぜもききて



小屋同し如きあ又のとより牧ぬくこぎ来り皆〳〵汀ふ寄れば
如陸り人下りのるへ人も人こぎ人てやて再び笠稲りぬ
棹さし霧の如くるこ面そて汀をたるれ沖の方しあを動く皆こして
汀ふよれバ人陸上りぬ又のとより笠稲る人のれバ沖ふ如るこの
霧の如くすこの牧夜ふて歩る時ハ浪ふ四れて翼を
もすび咲の比のハいづち〳〵漕り行て居るの色と成今ふ是を四八庵
そ西湖が花壇ゆりれて五湖ふ出る朝そハ東屋の君
の橋の小屋ゞ渡て棹さし浪ひし又江口の君ゞの美魂いまゞ消
ぜび羅澤深川と云所にて夜ふ入て
猫児を送るの書

但し猫は必ず兎を捕まえて食ふ故に猫の兎の
先者猫兎猫のおや毛を抜て毛を絶て繩の如く要をよりこうし叶
皇大い眼ハ鏡の日に向ふが如く耳ハ忍者芭蕉の如く解るして似
ものき尾ハ弱く弱く而き常山の蛇のごとく尾ハ曲る爪尖まて
銀を以て作る釣針の如く曲る時ハ伸て鉄の槍をも破りつゝ還る時ハ
いそろ綿をもらべ動ちいさく胴処茶をふく穏る時ハ桃林に
睡る牛に似いかる時ハ山谷を走る獅子に似る耳鼠の言をいまけば
物を含る兵の恐て敵城に入が如く眼に延をとる時ハ立て延を
為に成老鼠の走り廻るを捕梁必ずこれを眼をすゑ牙をもて
の背を立尾を延延を屈し忽飛付て喉を噛る事に蕭妃

が言の如く此の兎捕まえて食ふ故に猫の鼠を能く必
出るとも武ハ必ず縄を付ておかれ小児の手を結ぶを食ふ也
もれ出ずるとも必ず縄を付ておかれ小児の手を結ぶを食ふ也
ごまめ鯛節なき時ハ氣力なとろく寝ハとろけ
ぬ子ハ鼠ハ蛇ハ毛を抜て痩眼疎食ハ
ぬる故さん膳棚をさがし者を盗む人を使ふ又回さを食
ハ百里実が虐に有る時韓信が樓船
ぬるまゝ回に対し退ぞ雑の仮示曰子母の子ハ常に有る伯
楽ハ常に行べと従て君の財を盗む則飼る猫の如く君を
窮する時ハ必ず人を貪る時必盗む手能不拵る人を
去て手ものを盗む時必捕べ勝つの猫を鼠を狩しむるゲ

如一又必ずあるべき用ハうの貴重なるべく福延ずれハ必ず
ある延免勢ハ魚肉をいろえざるべく延その剣ハ人の賢愚にいる
ゆゑ公少延を必て高ぶるべ[illegible]むるべ奉ものゝ穴賢

拷鈴拷小木の辯

拷鈴ハ油煙の上を家上とハ[illegible]を敲口ゆき[illegible]を敲すべき肌ハ竪[illegible]
小刻こめ有り[illegible]ハ富士山ハ[illegible]ハ富士山ハ[illegible]ハ
富士ハ似るゆ油富士ハ似るを敲せば富士ハ油ハ似るを敲せ
ざれば天地と形と同じ[illegible]する物ゆゑ[illegible]を拷ゆゑの
悪しきゆゑ小拷鈴のゆゑハ能せば拷小木をいう有る能本を
以て拷る山椒の木を上京とハ[illegible]を敲ゆゑ[illegible]大いなる

松葉にあぜり延をハ拷鈴小入れて拷と拷ゆゑハたゞ
めぐるの天地の如くゆゑハ逆鈴小似ゆゑを言ゆゑ
くぐるくして地を敲る雷の如くゆゑ雷の百里ハ震ゆ
陰陽おせまりて鳴る雷ゆゑ陽の言ものゆゑハ又陰の言ものゆゑ
ゆゑ水火おゆゑを言ハ言有り拷鈴のごとくする拷
鈴の言ものゆゑハ又拷小木の言ものを拷小木拷鈴おゆゑ
を言ハ言有能ゆゑ能まりて言をよく和ぎ能を物能
言ハ言有能ゆゑ能明友の点和しゆゑ
ゆゑ言を調ゆ君臣父子夫婦ハ人和明延をハ
ほくゆゑ調ひ用をゆゑハ又ゆゑの君父夫ハ朋延をハ
拷小木ハ臣子婦夫兄弟ハ拷鈴先拷を[illegible]

拵少未足交りを言葉純和し純廻り純こなしてを用をるん
いのてを地の心陰陽和合の足拵拵拵少未の巧みを又ゆゆうこ
足を不測のゆとやいをもむ

匕首の論　匕首ハ懐刀

世に匕首といふ物有もきてんみてび懐ホ藏て不意に人を害る
の刃く世男に眼を長り眼をいし命と大丈夫荒する者毎く
足を出ゝ足を出ゝ足を論ずるに出る者ハ事に物を常に出し者人
の茶碗ハ茶の湯の席面〳〵足を解る有に時出る足を拵むるや
出席に到て人に命を害せんとし彼れ
命をたゞかる害するのたくこいつバ匕首有とも十寸の

刃物ゆゑ書物に敵せんとしハ組てるを者ハ彼れハ謀りて
ほふかて命ハ不意を組まる彼れし激力のゆゑ始より組まじ彼又
別のバ命ゆゑ匕首を用るに有んや志する時ハのの意ハ有
志じ懐を示ふ文ゆゑ又命平生の事言ゆゑ人の席
をたうて人を害せんとのバ俄病足より出てるに出し又無力の席ホ
して人命を犯しむ出て席を退てるをのさむにのうさきよう
のん勿くとてるをいのまてんハいづれ少〳〵忍びて大いホいる量のせ
まきの事に絶ち古の言に曰ハ出るよう敵てハ出と我匕首
全く身の固ハ無ゆうべの出ハ人の席に命をいのまて義に
有バ不敢の罪足より医きハ出又刃とけ鞘ろうぎ懐ホ

積げて服を指バ怪奇を弄むともやすべきさし刀金〻大丈夫の拭
べき物にいつべ況女の敷とすべし換育て法ゐき物さヒ首なる
べしいつ長安の耳掻よハ志らず

市中の辯

夫れ市中の位置と山谷の幽居と奮ひいづれか是なるや世のうきより
も住よかるらんも吟えん又山の奥ふ廉で居るもよく或バ粉うき
時ハいづちけらむもいぎろうちち世ハ小隈ハ山に隈ハ大隈ハ市に隈
るとハいど山居せぬ人のいつまハ住ハ宮めぐらむ奇も山居せね
ハ山居のいんだいハ初べ知ざれハ山ハ山し里ハ住も山がよく黒ハ
いのきれ沈ハ志べし山ハ目の没るれバ見ふらきるもも見れ拭

れバ吟ふきるもも吟ハ有れバ人のいハ志も長ハ巣をみバ遠ハ乃
いの面きも嗅れ延ハ奇國ハ弥の乃寂ゐ鈴ゐ心ゐ吟の稼
を見べいを吟えてさのミ居ハきれ物ハ有れバ来て志れバ
別拭つ濃奇の異安の強しさハ松風の音も同じく泄還の雑人の
喧地ゐハ廉廉の拭ゐるが如し濃奇祭文のふ」ゐるハ清ゐの轉とも
ゐぐゐあふ星の旁かして松いの籠を味ひ紡績の功ゐて西疎の
錦を求むハのまづき朔ハ生者の老有腸のつゐく夕ハ刻たど
この第来る病ハ醫師毎くよゐて湯腐色庇留の常り
ゐけれバ地を焼れゐく流飯ー鑠り有れバ慶犬ハ吸有 蝋燭お
えとすれバ池くを黄葉入れむとすれバ新〻と書る味噌塩

丹小豆あらう酢醤油ハ赤飯でも賞れ酒ハ島の唱く志のめり
海苔ゝるまでも用ゝくの小でつち有老の目の長ゝれど寝て垂て
用を無じ紙の月の明ゝるの雪子略燒有かゝる所に住るれて
いづれの家みつりぐき自由とハいづれの人の好むれるや物に
かゝれば月も也もむづかしく松風もやるまし如ちゝぞ財ハ注子も耳ふ
毎ゝ市中にのゝ日ゝるしゝうぐき

百鬼行

尼物喜ハ物を化るる有腐蓮の性ゝるきも蛍と化人ゝの仕業れ不
堪ふ化る草虫ハ蝶ふ化田蔦ハ鶯と化楠ハ石に化荷海苔ふ入て
蛤と化山の芋ハ鰻に化麻ハ化て九こゝる古足袋古襪ハ茶

椀鉢ゝ化ゝ物るの家ハ今日の糸ゝ貫と化尚年の男女ハ来年の
濤ゝと化蛾ハ蛇と化むすこハ親に化恵性の悪家ハ鷲者に化錦入
月ふ明て給と化下弦夢の雪結夢と化るハ天氣ひ寄ゝ朔の暗夢
夕ゝ山夢と化る云夢蚊の没者ハ女と化ゝ所ゝと化ゝ所ゝと化智者
と化恵と化寒と化ゝ逆ゝハ者ゝ人の男ゝ化物ゝて人ゝ男ゝ家ゝ化せば
又大樹の精ゝ化石地蔵ゝ化ると天地の男ゝいづれゝ化けぎゝんや狐狸
赤猫河獺この音の影ゝよく化るゝの上ゝるゝの成ハ男女と化
男ゝと化小僧と化田舎と化毛ゝ毛ゝ毛ゝ人ゝふゝて化け能
人の魂をとゝるゝと云ゝ極ゝの化が古ゝの大入道男就入道と陸奥
の隈ゝと見えゝこゝゝ人ゝとして男ゝむと云ゝ世の中の害まで

和ぐべうべき共傷の男に化る能く人をあづけ能人を拾ぶ世
の中の害は化者よりをそろしきなり

生醉の法

或人俳諧の主言に主の生醉こいかなる句をして或判者に長を求判者
加筆して主の生醉いづれ生醉に四季を賞しやとて長を降りと経今
面白に利者の未練四しき事なるき物も事を付面白く有なし
死物も活物こしたきもいつうべと云なしてん俳諧のいつすしこ四べ
今生醉の四季を分けむに先霞こしたえ陽春て燃る京乃人も
粉面るに老ても肩ぬぎ一年まるる祇園面白くこうぶらまなこ合
聚知ぬ小唄うたひ切ぶ七夕より重ねて今一ツ部く後る

淋しき事の限りなきに、又暑さ堪がたく、
ぐく鄙びし山の生涯は面白きものゝ
を添へて、新井赤め目すがら汗に帷子もしとろ
の苔る目もいと精神しく、ふくさげに又秋の生涯は衰れる
萩の下露垂まどひ荘の上風身ふるこて虫の音辺る夕暮
さをぐさもうこて色しるゝ又秋の衰れも初めて
るゝ、ゝ衰る生涯ありゝ、みの生涯はいやし
の水引ぐもりて風すきまじきに寒病緩べて延さやせ
うゝ飽色こそ人とてゝ、人世生涯に世事をこいと利者
物の情を知べ俳諧是今生涯に智て遷ず世事を

付けこんふ事の世界はうとしく憂癒し暮の世界はいつる色
くもし秋の世界は静ふして風流しみの世界は奇麗ふして健
ありとゝ、べし

瘴癘の論

山植既に官を辞て去るに不癘大小無遠近も悉く頽れ口逃
を流し幽情にの多ぐ愛牛の見向ふ如し植又て茅をの
むと人癘大が曰吾子は延いるる人で植が曰但主ゝて
家癘の茅をたくはるゝいる植が曰吾聲を如農本茅色ゝて
沙を報んと人癘大が曰吾子名はいん但ゝ久しきや植が曰名は
山相如字は植といふ但ゝ官に生ゝ和ゝ純ゝ

面病によりて辭し去る病犬が曰昔司馬相如筆を橋にとゞめて出
て仕ふ浮洲にて漁りうれ去るも面病ありき去りとゝ大丈夫
志をとゞるゆかくの如し今吾子見る所と名を同じくしても同じ
かゝる黄金白璧をいづれの和に得るゆをする也戈長門を賣
るに足るべ蘭又蘭氏が秦王に射せしに及べ名のゑ蘭司馬
と同じくして牙僅に三千の下に居食に魚ありくわゝ嘆る臣逃して
牙病有て自ら醫を好め先ず去るも身の病を治するゆを得べて
他の病を療せんとして赤うみが出ざる如し實に世ふゆ陳陽嶋牙の上
知べと八吾子吾子かくの如きが也に附と人とを知べ附と人を
知ぎる也に志をとゞるゆ臣是を蠍氣とゝ植白沙が言

むべ去るのれも又面が醫を吟べし怔忡傷息加るに眼疾を以て
如ゆまざ出病を治するゆ也とゝ能面が大病を療し得
ちまれ牙雅の病ハ怔忡して治べし心神の病ハ怔忡して難し怔忡
眼疾の如きハ牙雅の病ハ名利仕官心神の病ハ今是を治して
面自然ゆまる也霧を脱て是を八蓋て利わまは心を安の有の
ゆ逍遥せだ自ら牙雅の病ハ治べしとゝ病大白よ吾子實
に自ら心神の病を療し切ち去る牙雅病者也面吾子に茶を更
でしとゝ面病こに茶べ面知ら造化の去るれ面則
ゆるゆとゝひて心の中に牙を投ぐぬ

好惡の辯

世に好悪つゝ方皆それ〴〵心の偏る故なり之好と云ふも害有
きつひと云ふも又害有り酒ハ下戸ハ酒好き直りぐと雲り上戸ハ餐
好と云へしとい酒好みて餐雲り云ひ泥酔の浪ふ泥のべ多ふ粉雲を
煙草をもうまがり青痰好ハ夜嚏を志り夜咳好ハ青まぐひ
を知り是ハ生ひ爭ふの害云ふ又さふ者ハうまふ好者より
悪ふ者をうとむ有学文好ハ湯好仏乃好の類又好者ハうまふ
きふ者をうとむ有碁好ハ碁好ハ碁好潜上好碁好ハ碁好ハ碁
好鈍好殺生好裏好裏好時貪好の類又好悪ひ
のつゝぬ物有り茶好茶きひ能好強悪好好悪の類
世ふの類乃ハ好悪ひ碁魚ふ邪正一如同穴の狐狸ぐ

人皆好家ハ好ふ人ど面〳〵ハ和を山樵こぐきハ漁〳〵ハ
ふつけも有死ふ〳〵生ハ死せども又死好も有て身投ぐび
〳〵う自害心中の乃ハ一疏ハ宮ぐ〳〵ハ宮ぐ〳〵ハ宮ぐ〳〵
も有胡々の婦業魚ふもふ〳〵ひとふ有年畢竟自内
是ふひふて面倒の偏より部ふ面ぐ一生ハ百姓ふ書悪ふく湯
風のむすふ湯ぎ〳〵ひふし兵刃ふ刃ざるふ刃ざるふ極悪悪の仏
きうぐ地獄ずきの死人も有ほど人ハ天地の星ふ天地ふ人と考ふの
ひし天地ふ〳〵ふ悪ふ〳〵ふ好天下の人米の飯の嫌ふきそひ偏
湯〳〵う

接行の辯

一日沢蟹横ぶ一ツの蟹有 完全にて眼中に物を見る毎日
天をさし二ツのちからをあつて食をさきこと有り 物を制しそれを
ハツの足左右に分りてそれより横さまに手蟹のごとく四
足にこの蟹を蟹と呼び蟹や目を上ふ横
ふり蟹世の中を走りを得て成蟹 世の中に上て目ぐつく
横ふり〳〵芦の葉のかのれたるあき 是別足に手ゞ目
ゆしをもつて蟹又りんが性を編ぜんば蟹の足なんぞ分り
てこそ金身平〳〵足のつゞひ又横さまよりて横ふりる蟹
は蟹の歩ぶいちをを長まて向く歩むとしてもはゞうゞ強
い蟹の横ふり八別歩てはりく横歩といゞうゞ蟹

命ずるに切りの時は是を横ぶりとゝめ上に目のつきする天
こゝに甘んとする人は必ず掛名を性の更ちなれば性をまげ
てしりぞくべし氣質性さがしき人さん縱高帽子とは
なるべくしたる高かりて地力ある人さん米搗ふすべくしまげて是
をすべ時は生業のなべぐちのことにいとうて性を害ぬ
故おもひて其ハ命をもつて一生をいのやまつて死ん性の更さ
ゝる如を能さ見分を食べすべの更ち高帽子の白さん
鉛ハ銀と同じくして飯粒の古さに復是ハ用ゐまじくして
濃海去来の辞一
測明よく五年の米にてつゝんべ故に人間天命を楽むべ

測明去来食物同じ田地有りて食ふ所ろ僅僕妻子
を養ひ酒も格ふ海ろ也ばかりハ仕官を与ん今の生
測明ゝまゝ志有ゝ官を拵て人食べき田地もなくば
義能を「やるのも世間の鉄氣にはをつき勝ぬ人ふつくだの
消ゝ「ゝ」とせんとて宰相ゝ「ゝ」ハ高かつぐに地位命
ハ命命にいのべ割切の門のなくの法度器のなき因人間
絶ゝ定ゝべ乱ゝ命命高多を高ゝまゝ人
ゝ生ゝ甲斐ゝ生ゝ人ゝ甲斐ゝ搗ゝ人ゝ米ハ高ゝ
測明昔ゝ田畑ゝ米ゝ米ゝ名を探ゝ
をゝ分別ゝ仕合ゝ田地を買ふ入れて流べ入れ地乃

蒸地有て口をすゝぎ和みゝれ

豆腐の賦

豆腐といふ物有り味淡して清くして切や玉を花の宴
に酔を醒すに腸を腐に若く物もなく爰に二仏の昔一番の
清酒奴を腐小暑を忘る秋の月も行をふと〳〵西小路を訪ひ
雪は湯を腐て寒を凌ぐ又菜飯の夕は田楽の風味安倍茶
の茶はこゝろのまゝ有或は古人の賦して松陰の乃ふ賦
ぐ〳〵と味れて宮内の少輔山路を拭し鎌倉の寺は田楽の
好者と世ゝ乃ふ西路ふ行ぬ角を入れば人は珠を振て人盛
ぐ〳〵ふの歌句とゆ思ぬ琴の若弄豆腐まとゝ有ぞ乃年振

弥は紙雲ぐ〳〵を吹て浮世彩ゝ仏の乃は南径ちぐ〳〵西小
清水ぐ〳〵を和揚を腐小清が雪をひこつせずて人の心を考ぐ
ゝふのゝれひは新しぐ〳〵ふ又篇〳〵ぐ〳〵ふ侍て賽の目ぐ〳〵ふ侍
腐ぐ〳〵の好物ぐ〳〵て〳〵ぐ〳〵ふ明れば若雑小代て精を乃菜味
を張て口涎角〳〵賞ぐ〳〵きものゝまゝ

自嘲　脇〳〵との伝

夫れ雑湯角ぐ〳〵て〳〵物を賦すゝ有り天は地小賦上と云下と
谷づゝ日は月小賦し星は辰有若恩の賦山みれは川有海と
男れば陸と彩ゝ小は大小賦し角は九有老とゝば少と云男女小
賦し亜ゝれば曲有り留ゝれば死ゝ生れば死貴者は恩者有

裏にて見れば裏と云弗は仏に対し本は表に対し食は石に並び
[illegible]に際に対しては[illegible]に対し腹有れば背有り目は耳に対し
異に対し口は鼻のこに対する物なれば一分ふをする眼
耳鼻舌唇は[illegible]毛広みを心の奴にして[illegible]安きなり
[illegible]中に[illegible]に[illegible]心を[illegible]使ふべきにして[illegible]
[illegible]ばかりきが也に自ら安し彼れが用をなすべき条点に目当や
[illegible]の[illegible]さくの物の業を働し能を用ふるものに出て
[illegible]依然として一身の内に[illegible]心の為に[illegible]
働かざれば静心静かれば安し安ければ病なく[illegible]
[illegible]の[illegible]を見るのごとく心を[illegible]海のごとく有財嘯んと欲して

池が岳所の[illegible]しく歯を[illegible]足いらざる法
有てやいつまで報有てや寝て対する物のなきも[illegible]
自ら名を脚と呼ぶ去て[illegible]雪の如きもてつくれば[illegible]
[illegible]は[illegible]ばいつまで寄

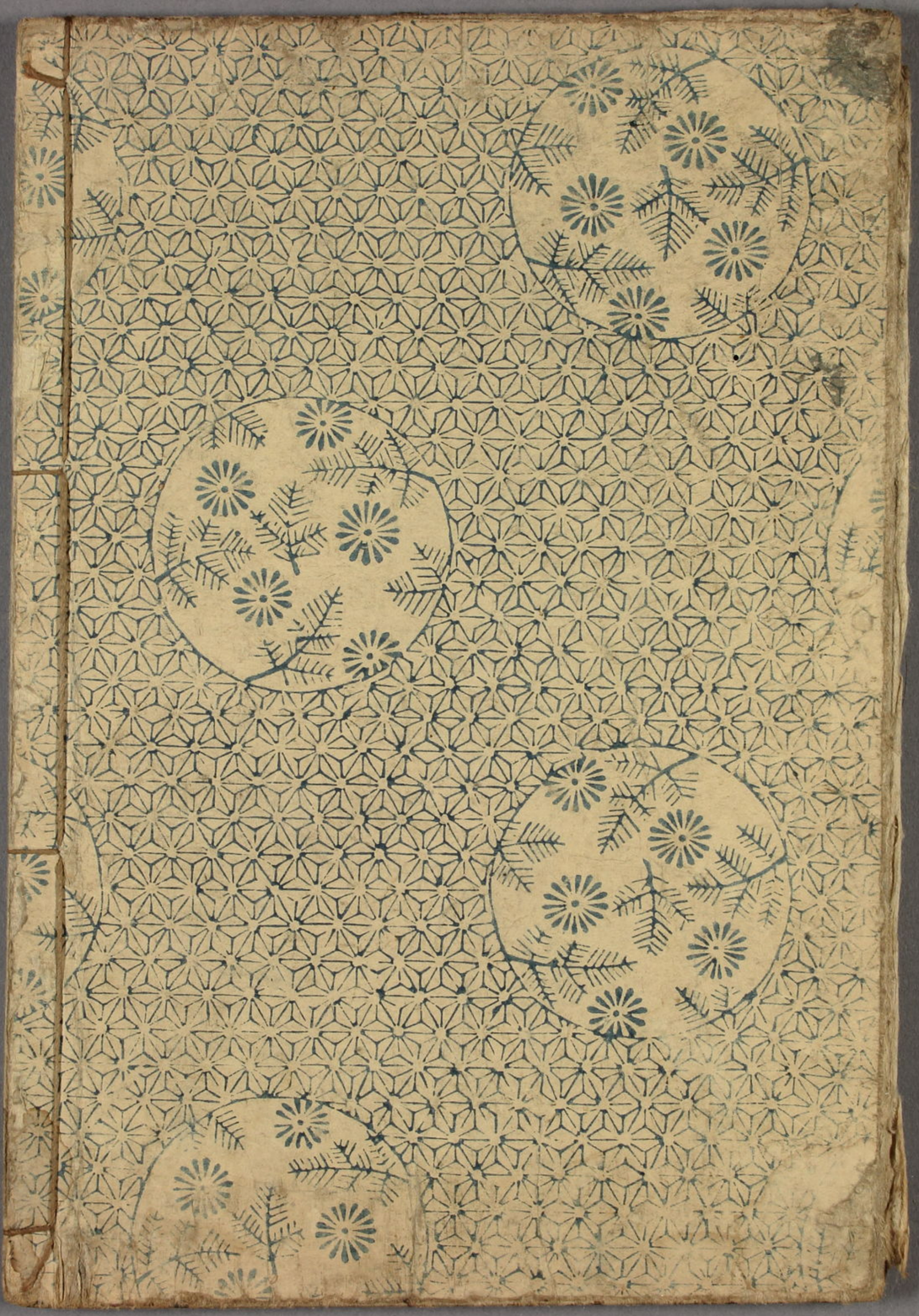
吉原の賦

まれ吉原の里は武江金城の長に有り家の格は[illegible]家をなす
[illegible]谷を谷すれば囲に場をなしめぐらす田有り東は三谷砂利
場に隣て左に山をつぎ[illegible]迫て隅田川流れ
西は蔵海金杉に並で日蓮をつぎ坂をもちて[illegible]東叡山
迫て北は大門蕩として小[illegible]衣紋坂に登りては[illegible]場を

又さら同じ堤もことして歩千程ばかり瀧の八滝寺を東して
観音堂に肖る廊の四縦横ふ乃ゆを置て大慶彩を舞び
山墨の沸ハ稲荷の九高仙と云仏家朝日と云いつれも灵験ち
いつくしつる家を構をいし鎖ら人百頃さいに疑し墨は
極楽を至不し極楽を称て女郎と云女郎に位階有を家ふ又
ふ有搗屋有茶屋有古手搗ふハ搗屋ふ極び嘩しさん茶ハ
茶屋ふ有び大文搗ふの乃中さん茶の男をつき紅白の紙紙
飾ゆ〻く立をく乃る頃ふハ半機老家立を目を細し
徙を流ふを家ふを風ふこを女郎にを庭改有を結搗を
つに家〻る廊下有れバ廣〻る庭畝有燈斜ふ畜搗る

を烟鍋の湯氣く下ゆに勝を惟ハ吸物を拵る〻雷廷
て知り駕く八宮の呂り人を宮に繰ふ有鍋ふ有女郎みを
糸行ふ熟る有疑を綱べ疑を乃べ或ハ囲碁双六ゆ碁〻
骨牌茶の湯俳諧弓連ふを宮を女郎によって歌ふ二
上りの三味ハ枕を鄰て吟る端女郎の部ハ後常を挑て乃る
宮に上戸有下戸有女郎又ふ盃入れていさんふ如く
物ふ如し青ふ〻ゆて飲人をちびま孝歌文抵を乃
て一座毎ふ乃上戸の座敷ハ騒〻下戸の座敷ハ静〻如
今の妻ハ青〻ゆ別深の糸ハ赤めやを真蘭ゆて深墨ふ入ル
呉郡の綾蜀江の錦菊ふ用ふ乃染て沈ふ赤競し赤めや

ある物語りを聞て延るも有れば恨の涙を云募りて泣て床も
有或は酒のゆうは云募ふとなげき嘆ある有酒肴の饗応を
出てより夜〳〵又の逢瀬を編し別れの酒ふ焼味噌を味
茶屋新宅にぞ帰りて色恋を去ん甚事を知ずして
こゝ事を耳もずる爲は親ふ疎まれ爲を亡んこゝ事を知て
事て越ふ爲は讐を新で心を補ふまを害せまを書ふの
仙境まことに山里

延享元年　京都書林　堀川錦上ル町　西村市郎右衛門
甲子の秋　武江書肆　本町二丁目　西村源六藏板

昔の反古二の巻終